

原生期の織布（下）：九州の組織痕土器を中心に

鏡山， 猛

<https://doi.org/10.15017/2329131>

出版情報：史淵. 89, pp.27-43, 1962-12-01. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



原生期の織布 (下)

——九州の組織痕土器を中心に——

鏡 山 猛

目 次

- 一、緒 言
- 二、資 料
- (一) 資料統稿
- 三、分布と器形
- 四、年代について
- 五、布痕について
- 六、平織布以外の組織
- 七、縄文期に於ける布
- 以上(上) 第八十四輯
- 以上(中) 第八十六輯
- 以上(下) 第八十八輯

四、年代について

近年縄文晩期の調査がさかんになつて来た縁由の一つには稲作の問題がある。既に述べたように近年弥生前期初頭にも土器についていた粃の圧痕や粃粒が検出されたが、縄文晩期と称せられる一連の土器にもあることが最近注意をひいた。

本論もいわばそのような総合研究の余波として生れたさやかな考察から出発した。この時期——いわゆる縄文晩期という概念は最初土器の編年から着手されなければならない。

西北九州の総合調査が日本考古学協会特別委員会によつてなされた時、土器編年は最も重要な問題であつた。昭和三十五年と三十六年の両年度にわたつて、佐賀、長崎両県で数ヶ所の遺跡が発掘調査された。その各々の遺跡の調査概要は既に発表されているし、又かなりの程度の土器集成図も用意されている。ただ問題は将来なお資料の広い立場からの検討によつて組みたてられる日を期待したい。しかしここに取りあげている組織痕土器はいずれも縄文晩期の遺跡から発見されているので、さしあたつて一応關係遺跡の土器様式を通覧しておくことが必要であらう。

これまで縄文晩期の九州の編年にとりあげられた御領式土器と、弥生式前期（板付1式又夜臼式土器）との中間を埋める土器様式として、一般に設定されているものは次の三つである。

第一 黒川式

河口貞徳氏調査

鹿児島県日置郡永吉村柱野黒川洞窟

第二 山ノ寺

古田正隆、森貞次郎氏等調査

長崎県南高来郡深江村山ノ寺

昭和三十五年三十六年発掘調査

担当者 森 貞次郎、乙益 重隆 賀川 光夫 各氏外

第三 原山式

長崎県南高来郡北有馬村原山

昭和三十五年三十六年発掘調査

担当者 森 貞次郎氏外

従来の組織痕土器は前記の三つの様式の土器に伴っていることが注意される。そうして黒川式よりも前代にあたる御領式に伴うものなく、板付Ⅰ式以降にも出土例がない。勿論これまで注意された組織痕土器片のうちには伴出土器不明のものがあり、特に南九州の下弓田遺跡発見の布痕土器の類品の出土例が同地方で最近相ついでいるけれども、伴出土器が晩期縄文かどうか疑問を持たれるようになった事を聞いている。しかしそれ等の問題の土器を除いても、前記三つの夫々の代表遺跡からも採集され、又協会の調査でも発見されている。実はそれぞれの代表遺跡といつても、果してその採集地点なり採集層位が、純正の一様式を示すかどうかにかつて当否が決せられる。それには表面採集でなく正規の発掘調査の際の観察が立論の基礎になるけれども、これは今後発表されるであろう各個遺跡の詳報によつて知るべきであろう。ことに原山遺跡から採集されている布痕土器は、果して原山様式に伴うものか検討を要する。同遺跡には黒川式の外山ノ寺式の様式をもつ土器をも出土しているからである。

晩期縄文に精粗両様の区別があることは通有の特性であるが、ここに取あげた組織痕土器はその何れに属するであろうか。精器が日常容器として用いられ、粗器が炊き・用に供される可能性はある。というのは深鉢形の粗器に煤がついているものがある。煤のついている土器は組織痕土器にもかなり多く、それが炊き・用に用いられたことを示している。内面は多く研磨されているけれども、条痕を持つものがあり、手法としてはたしかに晩期縄文の特徴を土器自体に具現しているものがある。更に肩部の屈曲にも同じ様式特徴を示している。この場合既述のような型抜き製の製法による場合には、肩より下半部のみがこの法により上半部は輪積みにしている。それ自体精器ということとは出来ないけれども、部分的に研磨の手法を用い、あるものは精撰した胎土のものもある。ただし表面の条痕を併せ持つものは粗製土器の要素を示しているものが多い。型抜きの法によるとすれば、単純な器形でしかも多量生産にも適した方法である。このような組織痕土器は縄文

晩期の土器の特性を具え、その製作は共通した基盤から生れたものであることがいえよう。精粗両様の区別をつけるとすれば問題の組織痕土器も第三類として、別類として取りあげることが適當であろう。といつてもこの種の土器が全く別系統の土器というのではなく、一つの土器生産様式のなかに生れた特殊な技法にもとづいた一つの側面であることはいうまでもない。次に前記三様式との関連を求めて一応の年代的な見通しをしておこう。

黒川式土器の名称は、すでに一九五二年黒川洞窟を調査した河口貞徳氏によつて提唱されている。この洞窟は縄文早期より晩期に至る間、長期間の住居となつていたことが出土土器によつて知られる。黒川式土器はその最も新しい時代のものである。今河口氏の論を参考として概要を記してみよう。黒川式土器として精粗の二類があることがまず注意される。精製土器は黒色磨研土器で土質が精撰されている。鉢形、皿形、壺形がある。口縁は外反する。粗製土器は麁形、鉢形で黒褐色粗質、貝殻口縁による条痕を附している。この遺跡から検出されている組織痕土器は上編遺跡番号9で述べた。

南九州の黒川式土器伴出の組織痕土器例としては、宮崎県尾平野遺跡があげられる。松添貝塚も黒川様式か或はそれに直結する時期のものであろう。黒川式土器は北部九州にも認められ、大分県ネギノ遺跡などもこの例であるが、此処からは組織痕土器は検出されていない。

第二に山ノ寺式のタイプステイションは、昭和三十五年八月に実施された西北九州総合調査特別委員会の発掘場所で、B地点がことにこの様式の出土地区である。晩期縄文の一時期をなすこの遺跡から、席目網目の圧痕土器が採集されている。まさにこの時期に所屬を決定してよい条件を具えていることになる。この時の調査では一般に山ノ寺式と総括されるもののなかに、丹塗磨研の壺形土器片や高杯形の土器が特に注意をひいた。又この様式の土器と伴つて二個の土製紡垂車の発見は、糸つむぎの用具としても重要な参考資料となるであろう。

佐賀県女山遺跡の出土土器は短期間の様式を持つて、黒川様式と山ノ寺様式の要素をふくんでいる。私達は昭和三十五

年度の調査によつてはじめて席目圧痕土器の完全な形を得た。この種の土器様式を持つた附近の遺跡笹ノ尾でも、多量の圧痕土器片を得たことは前記のとうりである。

昭和三十五年度調査に於て実施した島原半島の島原市礫石原遺跡、国見町百花台遺跡、小浜町小浜遺跡など、すべて縄文晩期の黒川式——山ノ寺式土器を見出した所では、例外なく組織痕土器を検出することが出来た。

第三に原山様式といわれるものは、昭和三十五年度の島原半島に於ける西北九州総合調査特別委員会（森貞次郎氏外）によつて調査された、支石墓群集地帯から発見された土器を代表としている。墳墓関係の資料としては埋葬に用いられた大形の甕、丸底壺の他に副葬品壺形、鉢形、浅鉢型などの小形土器がある。山ノ寺遺跡の土器と夜臼式（板付一式）との中間的要素が強い。この遺跡から採集された席目圧痕土器片は、古田正隆氏の所藏品である。同氏によれば、採集地点は前述の支石墓地域でなく、昭和三十六年度の調査地区に近い所である。

さて前記の晩期の概念を、黒川、山ノ寺、原山の三つの時期にわけるとすれば、その各々の土器様式に属する組織痕土器の編年を如何にするか、換言すれば組織痕土器に時期差、様式差があるか否かという点である。今の所三様式伴出の区分が確実なものが少く、編年資料に拠られる条件を具えているものが少数であるから、直ちに決定は出来ない。実の所原山様式の伴出例が不確実とすれば、前二者だけでは全く短期間の様式差とも思われるので、或は問題にならぬかも知れない。

註一 「島原半島及び唐津市（女山）の考古学的調査」

九州考古学第一一号

「島原半島の考古学的調査第二次概要」

九州考古学第一四号

註二 「黒川洞窟発掘報告」河口貞徳氏

鹿児島県考古学会紀要第二号

五、布痕について

組織痕土器のうちで第一に注意したいのは布痕である。平織布の圧痕はパーセンテージにしては最も少い。既述の調査例は次の三例にすぎない。

- (1) 佐賀県唐津市笹ノ尾（遺跡番号2中編に追記）
- (2) 長崎県南高来郡深江村山ノ寺（遺跡番号3）
- (3) 宮崎県串間市下弓田（遺跡番号20）

この他に串間市附近の布痕土器については、前に遺跡名を列記したが、実物を見る機会がないので、今はこれを省いておく。以上三ヶ所の出土例については、夫々解説を加えておいたので再説を必要としないが、その後熊本県の緒方氏が布痕土器片を採集されて、その概略を報じられたのでここに追記する。

遺跡は熊本県上益城郡甲佐町（旧乙女村）麻生原、中編に遺跡番号35と記載した所である。採集された布痕土器片は三片で、同一個体のものであると思われる。緒方氏はそのモデリングと各破片の略図、解説を筆者に贈られた。破片はすべてゆるやかに彎曲する胴部で外面に附けられている。厚さ八—一〇耗程度、破片径五糎内外のものである。内面は黒色を呈し研磨されている。経、緯の密度は九×一〇をはかる。一つの破片の上端部には布目の圧痕がなく、晚期土器の粗製品と同じ器面の特徴を持つている。ここにこの布痕土器の所属年代も推測される。以上すべて平織布の経、緯の計測を表記すれば次の如くなる。（第一表）

これで気付くことは経緯の数がほぼ同数（緯糸が僅かに多いことは各破片に共通する）のものと、緯が経の二倍に相当するものがあることである。即ち前者は笹ノ尾、麻生原、下弓田の例で、後者は山ノ寺の例である。このような緯のつま

緯		經	
12~10	×	7~6	×
15	×	7	×
10	×	9	×
6~10	×	5~9	×

つた例は後の弥生式布痕にも実例がみられ、又同数糸目との対比が顕著にみられる。私達は直接には縄文晩期の布の実体を知ることが出来ない。ここにあげたのはすべて庄痕で、この他に現物布の遺存するものは知られていない。従つて土器の焼きしまりによつて経、緯数が変わってくる事も考えられる。しかし焼しめによる縮度は一割とみても、殆んど問題にならぬ程度のものである。スタンプされた原物体の布目も庄痕の糸目数を減ずるほどの差はないものと思う。

弥生式織布の資料は、僅かに長崎県島原市三会出土の甕棺のなかより検出されたものが紹介されている。^{註一}遺跡は支石墓を含む甕棺の群集墓地で、近年調査された甕棺は弥生中期のもの

のとされている。布片出土の甕棺は確実にはわからないが、現在口辺部破片が、長崎県立図書館に同時出土の銅剣類と共に所蔵されている。その現地からその後発見された土器をみても、布片を出した恐らく中期のものに間違ないであろう。これを調査した故島田貞彦氏の報文があるが、これによれば経緯糸間隔は（一糎間）一〇×一三とされている。

同じく中期の北九州の例では、故中山平次郎博士によつて、布痕が鏡面についているのが注意されている。^{註二}経緯間隔は一三×一七を示している。

弥生式土器関係の布目については大賀一郎博士の一連の研究発表がある。^{註三}

土器底面の庄痕は古く八幡一郎、森本六爾氏等の研究があり、^{註四}南九州から関東に至るまで多くの例がある。弥生式前期（遠賀川）以降弥生各時期に亘つて出土例がある。

西志賀遺跡は前期の遺跡であるが故森本氏によれば次の六破片があげられている。出土例では経、緯の比率（一糎内糸数）は第二表の如くである。

同じく明治大学考古学教室所蔵の西志賀出土資料について、大賀博士の計測値は第三表の如くである。

第 二 表

西 志 賀	経	緯	平均
	14 × 24		8 × 16
	8 × 20		
	8 × 17		
	8 × 16		
	8 × 15		
	4 × 8		

第 三 表

	経	緯	平均
	10 × 24		
	9 × 20		
	8 × 16		7.6 × 15
	7 × 18		
	7 × 16		
	7 × 14		
	7 × 13		
	7 × 13		
	6 × 14		

右の表の何れも経、緯の対比は一对二の割合になつて山ノ寺の例と近似しているので誠に興味がある。大賀一郎、井上義安、佐藤次男三氏は「茨城県那珂川流域出土の弥生式土器底面の布目文について」^{註五}更に資料を加えて次の計数を示されている。第四表（左表）

I 那珂湊出土例

経	緯
10 × 20	
10 × 20	
9 × 20	
9 × 20	
8 × 24	
8 × 19	
7 × 20	
6 × 28	
6 × 26	

II 同上東大人類学教室

経	緯
10 × 20	
8 × 12	
7 × 11	

III 大賀氏等調査の分

経	緯	
3 × 8	(1例)	
4 × 7	(")	
5 × 8	(")	} 2
5 × 12	(")	
6 × 9	(2 ")	} 7
6 × 12	(")	
6 × 16	(")	
6 × 24	(1 ")	
7 × 10	(3 ")	} 6
7 × 14	(2 ")	
7 × 19	(1 ")	
8 × 13	(4 ")	} 15
8 × 15	(3 ")	
8 × 16	(5 ")	
8 × 20	(3 ")	
9 × 17	(2 ")	} 4
9 × 23	(")	
10 × 17	(4 ")	} 13
10 × 18	(2 ")	
10 × 19	(")	
10 × 20	(3 ")	
10 × 22	(2 ")	
11 × 22	(1 ")	
12 × 21	(2 ")	} 7
12 × 23	(")	
12 × 24	(3 ")	
13 × 20	(1 ")	} 2
13 × 24	(1 ")	
14 × 25	(1 ")	
15 × 30	(1 ")	

計 61例

表^{註六}(左表)

この表で経、緯の対比が一・二となつてゐるものの多いことが氣付かれる。即ち経、緯の差が少いのは6、9の二例くらいである。前記の諸例はいずれも東日本のもので、地域的な特徴としてみられるとも考えられよう。ただここで考えるべきことは、西日本の例が極めて少数である点から、若干資料からの帰結を一般論としてうけ入れてよいか疑問が残る。

N 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

以上の経、緯の關係を弥生資料によつて整理してみると、経、緯糸目の数がほぼ同数のものから緯が経の四倍に近いものまである。しかしこの間の対比の差は漸次変化するのでなく、 1×1 と 1×2 の比例を示す二つの系統が見られることを注意したい。弥生後期には織機の部品も出ており、平織の技法も一部うかがわれるけれども、本論に取あげている縄文晩期の布の目数と対比することから問題をみておこう。前述の如く九州縄文晩期の平織布には二つの系統があり、弥生時代にまで継承されている事実がみられる。この事はどのような事由から生じたものであろうか。機はたの改良、織物技法の進歩により新しい様式が生れ、一方に旧來の技法なり織機おりはたが残存して、二様の製品を生んだという解釈も出来るのではなからうか。縄文晩期の九州例では、二倍に近く目のつまつたもの一例にすぎない事も、弥生期に至つて發展する織物の原初の姿を認めることが出来るであらう。

次に時代は降るが所謂布目瓦の布目について対比を試みておこう。瓦の布目についてはやはり大賀一郎博士の論者がある。^{註8}資料として武蔵国分寺瓦を取扱われているが、そのなかで文字瓦「萐」の刻銘を持つものを扱んでおられるのは賢明な方法と思う。なぜなら国分寺瓦といつても、創建以来長年月に亘つて修復、改築される場合が多く、奈良時代に限定して観察する場合は、何等か選択の基準をつくらなければならぬ、大賀博士は武蔵国分寺の文字瓦を資料として左のような

結論を出しておられる。

「今回の研究によつて何れの場合にも一纏中の糸目の数は縦、横共に六本だてのものが最も多く、次は七本で五、八本、または八、五本がこれにつづくがこれより荒い方は四、三本につき、細かい方では九〜一四本に、瓦数は漸次に減じており（中略）瓦の製造には一纏中に六本以下の荒布は少なく、五〜八本あたりのものが最も多く、また九本以上一四本に及ぶ細布も相当使用されていたことがわかる」。

ここに時代の降つた布目瓦を資料として奈良時代の布の実態をうかがつてみたのは、縄文晩期土器の型抜きと同一技法——範から土を離す役目をもつていふ理由によるものである。勿論このような瓦の用布は、当時の一般の布とかけはなれたものでないことは、正倉院の御物に残る麻布などと似たものであることから既に知られている。組織痕土器の布目は当時特殊な用布を用いたかどうか、私はむしろ一般に用いられていた布であると考えたい。結局布目瓦の庄痕は、組織痕土器の布の庄痕と全く同一の手法によつて、必然的にスタンプされたのであるが、瓦用のものは布使用の頻度が著るしく多いこと、工人の集団専門的な段階にあることから、自ら異つた面があらわれて来ることは当然であらう。平織布痕のみについていえば、縄文晩期の用布が奈良時代の粗布より糸目のつまつたものさえある。ただし平織以外の組織をもつものが、複雑に使用されていることが後者の特徴である。

最後に九州の組織痕土器にたちかへつて布痕に現われた糸目の検討をしておこう。糸目の太さは平織布にあつては直径一耗以下である。それ横糸の一纏間一〇本以上というのが普通であることから考えられる事である。然ら前にあげた資料のなかで特に明瞭なものと註記しておいたが、殆んどがゆるい右よりであつた。この燃の問題はこれ等用布の材料が、何から出来ていたかを考える場合の参考となる。大賀氏は絹布と麻布、綿布の比較標準を左記のように掲げ出されてい

る。^{註八}

布名	手ざわり	単糸の太さ	単糸の外観	単糸の撚り	単糸の継目	単糸の羽毛	粘土のつき方
絹布	軟かい	平均	こまかい	殆んどなし	なし	なし	中
麻布	硬い	大いに不平均	粗い	あらく撚れる	撚継目あり	少しあり	つきにくい
綿布	中	少し不平均	中	細に撚れる	稀にあり	大いにあり	つきやすい

片痕によつて以上の特徴を一つ一つ検討することは困難であるけれども、それが絹布或は綿布でないことはほぼ承認することが出来よう。残る所は麻系統の布となるけれど、麻布の材は多岐にわたつており、その決定にはなお専門的な鑑別法が必要であらう。

註一 「甕棺内新出の玉類及び布片等に就いて

肥前南高来郡三會村遺跡」島田貞彦氏

考古学雑誌第二十一卷第八号

註五 「茨城県那珂川出土の弥生式土器底面の布目文について」

古文化財の科学第一四号

註二 「須玖岡本の遺物」中山平次郎氏

考古学雑誌第十七卷第八号

註六 「下伊奈に於ける弥生式文化私考七」松島 透氏

伊奈三〇九号

註三 「弥生式土器底面の布目について」大賀一郎氏

古文化財の科学第一〇号

註七 「武蔵国分寺址出土の荏瓦面の布目について」

大賀一郎、大賀嘉子氏 古文化財の科学第四号

なお両氏共著論文に

註四 「弥生式土器の布目」八幡一郎氏人類学雑誌第四十六号

「日本農耕文化の起源」森本六爾氏

註八 「武蔵国分寺及び国分尼寺址出土布目瓦の糸目について」

古文化財の科学第六号

六 平織布以外の組織

前項で類例の少い平織布をとりあげたが、これは関連して布の発達の歴史を溯源的に考えておこうとした意図にすぎない。次に組織痕で最も普通にみられるムシロ編みについて考察しよう。蓆やすだれの編方を示す手法は縄文土器の底部片痕にみられるし、又晩期以前の縄文土器の胴部表面にもみられる。ただ繊維の太きさは植物の茎などの自然物を用いた場合、燃がなく上述の糸に類したものでないことが多い。ここで取あげる蓆状の編物は蓆の字が不適当であるほど目のつまつたものである。用糸も平織の布と同じ程度の細いものがある。佐賀県女山の例では、緯糸の目のつまつた所では一緯内に一〇本の糸筋が数えられた。このような細い糸で目のつまた編物は、平織の布と似た感じを持つているから一種の布ということも出来るであろう。しかもこの種の編み方をしたものが、二一五点中九三点を占めていることは、蓆目式の布が当時の社会の大きな需要を満たしていたとも考えられる。勿論この種の布が土器の型抜きの際に用いられたことを前提として考えれば、平織の布よりも一層効用があるという理由で、多量に用いられたという解釈もなりたつであろう。しかし私達は後世の、例えば弥生期に於ける土器底部に圧されたものがすべて平織の布であり、瓦の型抜きにも平織の布が用いられている所をみた。晩期縄文土器に、特に蓆編様の布類品を使用する理由をあげるのに苦しむ。殊に網の如きものを使用することは、網目が大きければ不便なことは当然であろう。そこで姑息の手段として二重の網を使用するということが行われたのではなからうか、このように考えれば晩期縄文土器の型抜きに用いられた布は、当時のありあわせのもので、当時の布製品及び布類似の製品の、種類と数量を暗示しているものではなからうか。事例は九州での採集品によるものであるから、日本の全土にどのような織物があつたかを知る事は出来ない。けれどもこの地域に於ける実状がその一端を示していると思われる。

平織の布の発生には当然織機おりはたの存在が予想される。弥生期に於ける機の部品が、出土品によつてたしかめられたことは戦後で、日なお浅いけれども当時の織物の一端は前述の例で明かであろう。同じような糸を用いて編んだ蓆式の布も、恐らく原始的な編機ともいふべき器具を用いたものと思われる。今日私達はそのような器具を現実に発掘品によつて確かめていない。しかしその糸目が細かく縦に並列している場合、恰も平織のたて糸のように懸垂されるか、横に張られるかしたものであろう。近代の蓆編機はタテ機はたであるが、原理的には同様の原始機が将来見出されるという期待はもたれる。それに懸垂のおもり（石或は土製）も同時に問題となるであらう。

網目について結びの各種のものは大脇直泰氏の論考註一に、詳しく説明があるのでここで特に取あげるのは略しておこう。ただ網に使用された糸と網目について、若干気付いたことを摘記しておく。網に使用された糸は概して大きく、女山例では径二耗、笹ノ尾例で径一・六耗——〇・六耗という数値である。やはり他の組織と同じく右撚りの糸を使用している。諸例をあげる際に特に記しておいたが、網目の変種と思われるものに一方の糸目だけが現われるものがある。即ち一方の糸目を極端に引きしめると、目がつまつて網目といえなくなる。く・く・からは網目の手法を応用しているけれども、結果は目のつまつた布状のものが出来る。このような方面から布えの接近があつたことは興味ふかいことであるが、爾後弥生期にはこのような類例がみあたらない。もう一つの編み方はた・た・み編みの手法による布状製品のものがあるのではないかと予想して、上編に於て将来資料の出現を俟つて追補する用意をしていたが、今日まで実例を知ることが出来なかつた。すでに縄文土器底部につけられた圧痕として畳状の編物が存在していたことは知られているが。

杉山氏の解説註二によれば陸奥十面沢の出土例で現代の畳目の如く蘭草で編まれているという。又同様の圧痕を大山柏氏藏品に見出されている。この畳目式註三のものは蓆目の横糸をつめて出来るものであるが何の理由かこの式註三のものは問題の晩期の圧痕にはみあたらない。

註一 「押圧文土器について」大脇直泰氏 古代学九卷三号

註二 「日本原始纖維工芸史」原始篇図版七二ノ一二

七、縄文期の織布

従来縄文式土器に布目圧痕が注意されたことはないではない。杉山寿栄男氏は「日本原始纖維工芸史」^{註一}原始編に於て亀ヶ岡式土器の例をあげ、羽前石名館出土土器片についている布目文を図説し、現代アイヌの厚司織より幾倍か緻密なもので、これ等は編物というよりむしろ平織物に近いものであると説明されている。有名な青森県是川中居の土器片にも同様の圧痕がつけられている。

次に大賀一郎氏は「新潟県千谷市上片貝塚遺跡より出土した縄文時代の土器面にみられた布目文について」^{註二}記述されている。この土器は一小片であるが、六籽×八籽の範囲に布目圧痕がある。一籽に換算して経、緯ともに一五本の密度であるという。布目の見えるのは土器の裏面で、かすかではあるが密度が従来知られている先史遺物のうちで最も細いことは、直ちにこの土器を縄文中期と判定することに疑問が持たれぬわけではないが、(1)出土層位が塔ヶ崎式土器(加曽利E式相当縄文中期)を含む断崖の最下層であること、(2)表面の一部に三列の単節斜行左撚り縦位の縄文がついて、縄文中期に縦位の縄文が多いことから、その年代を一応中期と推定している。一方このような古い時代の資料出土は、一例しかないで誠に不安であると断られているが、向後の類例を俟つて更に検討すべきであろう。この論文に於て大賀氏は二、三の縄文期資料を追記されている。

(1) 蘭田芳雄氏著「千網谷戸」両毛考古学会(一九五四)の「千網式文化期に於ける紡織」の項中この土器の底部には粗い布目痕がつけられていると記されている。千網谷戸は縄文晩期の遺跡である。

(2) 水野清一氏は日本陶器全集(一九五八)中「日本上代文化」の項で「北海道知床半島栗沢台地の墳墓(晩期前半)」

からアツシ様の織物断片が出たという」と述べられている。

この二例は縄文晩期の資料である。今関東と北海道では同一文化段階にありとはいえ、実年代に於て九州との対比が出来ないので今は単に資料紹介にとどめておく。

大山柏氏はかつてソヴィエツト、シベリヤの史前土器を中心に、織紋土器 (Textiel-Keramic) と称する一類を広い視野から取りあげられたことがあつた。^{註三} 氏によれば織紋土器とは

「表面比較的凸凹に富む織(編)物様のもので土器表面に圧入した結果生じた押文を指す」のであるから、ここに私の取くんでいる組織痕土器と圧文は手法の点では大差ないわけである。ことにその単純なのは網目文と称してよいといわれている。組織痕土器と異なる点は、織文が概して土器面に於ける施文位置が高く底近くまで施されていること、圧文が刺突文、櫛目文、彫文等と複雑に組合わされて、文様としての効果をみせていることをあげるべきであらう。彼の地域では新石器時代に端を発し、青銅器時代に終つた土器とされている。我が国の土器にみられる組織痕は、文様をつけるという意義から出発しているものでないことをくりかえしのべて来た。圧痕が全面にある場合は型抜きが必要によつてつけられたものであり、弥生式土器の底面にみる布目文にしても、底部を台から離すに用いられた手法であつた。ゆえにことさら織文なる文字を使わなかつた。ただ縄文土器に於て若干の網目、又はむしろ目の圧痕があつて、それは一応この場合に論及の対象にはしなかつたが、多少文様の要素を意識してつけられたものであるかも知れぬので附言することこしう。

すでに大山氏も織紋土器の論文に於て、我が縄文土器と一応の区別を考えておられるが、北海道口内附近の土器片中、一王寺式のものなかに三片が網目であることを認められている。ただし図示された網目文をみても結び目が明瞭でないので、ほんうとの網の圧痕ではないようである。杉山寿栄男氏の「繊維工芸史」解説図版をみても、網目の文様は一王寺出土土器の他、東北地方に若干の例があげられるが真の網目圧痕は殆んどない。左右、上下段のかかりがついて張られて

いれば、形は網目になつても結びがないから不安定である。この意味からいえば文様としての圧痕は、反つて網そのものを使用しなかつたということも出来よう。一王寺式の土器面には豊富な纖維組織物の圧痕をみるのであるが、さきに九州の組織痕土器にみられる席編文に類したのもある。編み方のプリンシプルに於ては全く同一であつて、そのような編物の圧痕をたどれば、もつと早い時期にのぼるものであるかも知れない。鹿児島市来出土の土器底部の圧痕に、やはり席編式の圧痕がみられる。(図版七〇ノ九)これは軟質の蒲の如き草を並べて、横の二本糸で綴り編みをしたものであるからやはり原理は同じである。このように考えれば、平織りの技法も竹ヒゴで縦横に編むことから発したと考えればどのようにも古く遡り得るであらう。しかし私達がここに取りあげている組織物は、糸が撚をかけた細かい纖維であること、それに平織布にあつてはその形は色々あらうが、機^{はた}を利用してという点に限定したものを対象としていることはいふまでもあるまい。このような組織に限定すれば、やはり縄文晩期以前の諸例はそれぞれの組織物の発生過程を物語る資料とはなつても、晩期のそれと一応の線がひかれることを認めざるを得ないであらう。

さて前述の九州に於ける縄文晩期の圧痕は、それぞれの組織が当時の一般の使用に供されていたことを暗示している。勿論それ等の組織は日本で製作され生産されていたものに相違ない。私達は一般の生産用具なり生産技術が、弥生期に至つて急速に海外より伝来した面を強調して来た傾があるのではなからうか。この伝によると紡績技術も織物技術も、中国其他古代文化の先進地帯からの伝来と考えることになるが、果して如何なものであらう。中国では既に漢代以前に絹織物の発達を見、織機^{おりはた}の発達も高度な段階に達している。しかし我国では今日弥生期としてみている機^{はた}の部品からみれば、彼の地のものとは程遠い原始機である。かえつて未開民族の間にみられる織機^{おりはた}に類品を見出すことが出来るであらう。つむがれた糸や織られた布をみても、中国より伝来の高級品とは思われない。しかも平織の布は実例としては数が少く、席目様の布が多いことは更に自生的な組織製品の存在を物語っている。すでに縄文晩期に於ては特殊土器の製法によつて、幸

にもかんりの布製品ならびにその類品を集めることが出来た。これは直ちに九州の地域を以て布の発生地、或は組物技術発展の場として特筆すべき立場にあることを意味するものでない。

私の取あつかつた資料は、九州の特殊圏内で発生し、広い地域に拡がらなかつた土器製法の特殊技術に伴つて、幸にも残存した庄痕により、織布の発展の経過を辿つてみようと思ひた一私案である。稿を重ねていくうちに、同学の諸氏から新しい資料を次々に頂いているので、将来一層その分布と密度が充実されて来るであらうことは確言出来る。ただこれまでに教示された追加資料全部をここに列記することが出来なかつたことをおわびしておく。必要限度のものは追補したけれども、将来補正の際新資料をよせて頂いた方々の好意にむくい度いと思つてゐる。

(完)

註一 「日本原始繊維工業史」図版第七七及その解説

註三 「織紋土器—ロシアシベリアの一史前土器」大山 柏

註二 吉文化財の科学第一五号

史前学雑誌 第十卷第四号

Textiles in Proto-Yayoi Period (3)
—Concerning the stamps of texture on
potteries in Kyushu—

Takeshi KAGAMIYAMA.

To this day, I had seen many pieces of the stamped potteries, but could not solve the chronological problem easily by my own surveying, now we had the good fortune to excavate some archaeological sites of proto-Yayoi period in north-western Kyushu, last year and the last before. I could collect the datas on this subject.

I hold that those stamped potteries belong to the last stages of Jyōmon period. The location and the stratum prove this.

I enumerated the examples of the woven cloth by the stamps on late Jyōmon or Proto-Yayoi potteries. Probably the fibers of such cloth were made from a kind of hems.

We have also some examples of the woven cloth in Yayoi period. There is no striking difference between the examples of the later Jyōmon and of Yayoi ons.

Technically, the origin of a woven cloth goes back to the netting or knitting fabrics. Such stamps are sen on the bottom of Jyōmon potteries.

In early Han dynasty, that is the first stage of Yayoi period in Japan, China was producing many fine cloths, not only the cotten or hemp made, but the silk fabrics also.

Probably, Japan was importing such fine cloths, it is possible, but I assert that the most of the early japanese cloths, as the articles of daily use, was being made by the native technics in prehistoric time.